

# 宗教・文化研究所公開講座講演録要旨

## 京都と鎌倉

野 口 実

まず始めに「鎌倉時代」は鎌倉の時代なのだろうか、という疑問を呈したい。鎌倉時代の京都の歴史を語るとき、取り上げられるのは承久の乱までと、後醍醐天皇が登場して建武政権が樹立される辺りの話ばかりで、歴史の断絶がみられる。そもそも、鎌倉時代成立の画期となる源平内乱（「治承・寿永内乱」）で、京都の社会はそんなに大きく変化したのだろうか。井上章一氏は江戸・東京イデオロギーの所産としての「関東中心史観」を批判するが、京都の鎌倉時代認識も、この関東史観に毒されているように思えるのである。上横手雅敬氏も、通説的な「鎌倉時代史」は「鎌倉幕府史」に過ぎないと指摘される。<sup>②</sup> たしかに、鎌倉時代になっても日本全体の支配者は朝廷であり、少なくとも建前上、幕府は軍事警察権を握るに過ぎない存在でしかない。

源頼朝の政権（鎌倉幕府）の評価 鎌倉幕府は東国武士の階級的輿望を担った政権で、東国武士は「在地領主」である、というのが戦後歴史学の常識であった。いわゆる「領主制論」による鎌倉幕府成立に対する理解である。しかし、宇都宮・小山・佐竹・上総・千葉・三浦・大庭などといった有力な東国武士は、幕府成立以前、果たして

在地にしかない「在地領主」だったのだろうか。そんな存在が朝廷に対峙しうる独自の政權を「草深い東国」に樹立し、あつという間に列島規模で展開することが可能だったのだろうか。

そこであらためて東国武士の存在形態を検証してみると、彼らは在地の所領支配と京都での活動を親子・兄弟間で交代・分業しながら担っていたことが明らかになった。在京活動すなわち国家（王權）守護への参加によって「武士」身分を獲得し、そのことが在地支配の前提になっていたのである。

さらに、彼らを束ねて最初の幕府の棟梁「鎌倉殿」となった源頼朝が、果たして従来言われてきたような東国武士の階級的利害を代表する存在だったのかという疑問も生じてきた。「領主制論」の提唱者である石母田正氏も夙に「棟梁は領主階級の単なる代表ではなく、相対的に独立した存在」であると述べているのに、戦後の歴史学者の中でこのことを明確に意識しながら幕府成立史を論じた研究者は上横手雅敬氏くらいであつたように思う。<sup>3</sup>

源頼朝は、後白河院の近臣源義朝の子。少年時代に上西門院（統子内親王）や二条天皇に藏人として仕えた経歴をもち、平治の乱中の除目で右兵衛権佐という公卿への昇進も可能な官職に就いている。一方、東国武士は「諸大夫」・「侍」という貴族社会の身分をもつ存在として中央の権門に祇候し、その政治権力や首都の生産力と流通ネットワークに大きく依存していたのである。とすれば、彼らが頼朝のもとに結集した理由は、古代的権力からの抑圧を背景に惹起された在地社会の矛盾ばかりでなく、平家による非正統王権樹立への反発もあつたのではないだろうか。かつて、子息義平を鎌倉に置き、在京して国家守護の一翼を担っていた義朝の再来を頼朝に期待した。彼らの意志はそんなものだったのではないかと思う。

鎌倉幕府を京都の朝廷に伍する存在とみて、中世前期の日本には鎌倉を中心とした国家があつたのだという学説がある。これを「東国国家論」という。しかし、武士論や鎌倉幕府の成立過程に関する研究が精緻化されるにつれ

て、その旗色は悪くなり、やはり幕府は国家の軍事・警察を担当する機関に過ぎないという「権門体制論」に基づく理解が支持を集めるようになる。そうすると「東国国家」論は形を変えて、頼朝以下の鎌倉殿を東国の「王」と見なす「東国王権論」が現れた。網野善彦氏（「東国国家論」）は、①京都王朝の養和・寿永の改元を無視 ②王朝の行政機関である国衙の勢力を奪取 ③「関東」は東国「王権」の直接統治権の及ぶ範囲を指す広域地名 ④東国の都鎌倉に王権の守護神として鶴岡八幡宮が祀られたことを述べ、五味文彦氏（「東国王権論」）は、⑤平泉藤原氏の達成の上に東国に王権を築く ⑥鶴岡八幡宮、箱根・伊豆権現を東国王権の精神的な拠り所とした ⑦関東祈禱寺を設定し、勝長寿院と永福寺に御所と鎌倉殿を守る役割を担わせた、そして⑧鎌倉殿の王権は実朝將軍就任時の『吾妻鏡』の「関東長者」の表現に示されているが、頼朝の場合は治承四年十月、彼が大倉御所に入った時点で誕生した——これらのことをもってその論拠としたのである。<sup>4</sup>

しかし、守護の職務である大犯三か条の最初に大番催促があげられているように、「鎌倉殿」は内裏守護など国家の軍事警察を担う権門でしかなく、幕府の（東国に対する）統治権は、承久の乱以前は地域権力である平泉政権のものに過ぎなかった。また、三代將軍実朝が右大臣任官の拝賀を行ったことに示されるように鶴岡八幡宮は内裏の代替装置であり、その参道に設けられた「壇葛」はまさに内裏を取り囲む「陣中」の「置道」をモデルにしたものであった。<sup>5</sup> これらのことから明らかなように、幕府は京都の王朝に対置しうるほどの独立性のある権力ではなかった。だから源頼朝を王と呼んだり、その政権を国家と称するのは無理であろう。国制的に見た場合、頼朝は「外が浜から鬼界島に至る国土を支配する王権」を守護する、あくまでも「武家の棟梁」に過ぎなかったのである。

六波羅と鎌倉　そもそも鎌倉は源氏將軍家の本拠であったのだろうか。伊豆で挙兵した頼朝が父義朝の拠点であった鎌倉を目標したことに示されるように、頼朝の政権は平治の乱以前の義朝の地域権力の再建からスタートし

たものであった。保元〜平治年間の義朝による「坂東の平和」の再構築こそが、坂東武士を彼のもとに結集させる上で大きな要素になっていたのである。したがって、頼朝の政権のモデルプランは義朝の樹立した坂東における地域権力とみてよい。とするならば、頼朝もまた父同様自ら上洛して在京するに至った可能性も高い。<sup>(6)</sup>鎌倉幕府の樹立を古代権力に対する勝利と捉える「領主制論」的な立場から頼朝晩年の失政と評価される「大姫入内計画」は、その延長線上に当然の施策として位置づけることが出来るだろう。また、義朝が義平と在京・在地の分業を行ったように、頼朝も猶子とした弟義経をはじめ、舅の北条時政、義弟の一条能保をもつて京都の守護を勤めさせている。この方式はその後幕府の実権を掌握した北条氏にも受け継がれて、在京（六波羅探題）・在鎌倉（執権・連署）を一族間で分業する体制が継続したのである。

結局頼朝は死に至るまで鎌倉を離れることが出来なかったが、それは高橋昌明氏が指摘したように意識的に福原に居住した平清盛の先例を踏襲したことによるのかも知れない。<sup>(7)</sup>たしかに権力を遠隔操作することによる効用はあっただろうが、彼には公卿議定に参加できるほどの有職故実に関する知識・情報がなかったのである。<sup>(8)</sup>そしてなによりも、自らの実力で再建した父義朝の遺産「坂東の平和」の維持が念頭に置かれたことと思う。

一方、十二世紀は中央（京都・畿内）と地方（辺境）社会との交流が活発化し、中央の地方への依存度が高まるにつれて地方支配の拠点作りの必要にせまられるようになった時代として捉えることが出来るのではなからうか。奥羽のエリアを包括し半ば独立した存在形態を示しつつも、撰関・院・平家といった中央権力に従属した機関として平泉藤原氏の政権が成立した背景はこうしたところに求められるように思われる。

東国にはこのような機関が成立する必然性があった。頼朝の樹立したいわゆる「鎌倉幕府」は京都王権への軍事的奉仕のネットワークを列島全体に及ぼすための機関として成立したのである。そして、それは公卿身分を持つ武

門（棟梁）が地方に居住して統轄する形式をとった。かくして公的な地位を得た鎌倉殿の家人（多くは貴族社会における「侍」<sup>さむらい</sup>身分に属する）は「御」家人と呼ばれるようになり、京都王権への職能的奉仕に対する社会的な反対給付として「武士」身分を確保したのである。

源頼朝の政権は鎌倉を本拠とする必然性があつた。しかし、形式的には王権・国家守護を担う「武家」権力に過ぎなかつた。したがって、王権に直結する首都を守護するためにも彼の本邸は京都に置かれなければならないが、それが平頼盛の池殿跡に南北二町という規模で造営された六波羅御所である。熊谷隆之氏も指摘するように、この六波羅御所こそが鎌倉殿の本邸（亭）と言われなければならないであろう。<sup>(9)</sup>

京都における頼朝の亭が決定するまでの経過を示すと以下のとおりである。<sup>(10)</sup>

平家は滅亡したものの、義経の搜索が続けられていた文治三年（一一八七）、頼朝は京都近郊の恒常的な宿所として後白河院の所有する「山科沢殿」を申請した。しかし、後白河院は頼朝の上洛を望む態度を示していたにもかかわらずこれを拒否。平泉藤原氏が滅亡した翌年の建久元年（一一九〇）、頼朝の「上洛御亭」新造のために法橋昌寛が上洛し、池殿の跡地に二町規模の「六波羅新造亭」が造営され、頼朝の関東下向後は一条高能（頼朝の甥）が居住することになった。同六年、頼朝は二度目の上洛の際にもここに入る。同年、高能が死去すると、頼朝の二女三幡の乳母夫であつた中原親能が留守役となつた。

そして、この六波羅御所は頼朝以後代々の「鎌倉殿」に將軍も在京中の本邸として使用し続けたのである。建仁二年（一二〇二）、二代將軍源頼家は六波羅の域内に建仁寺を建立。同三年、六波羅御所は焼亡してしまふが、暦仁元年（一二三八）、四代將軍九条（藤原）頼経の上洛に際し、建久の例に任せて新造される。建長四年（一二五二）、六代將軍に決まつた宗尊親王は六波羅北の「檜皮屋」（正式な上級貴族亭の建築様式に將軍御所）に渡つてから鎌

倉に出立。正応二年（一二八九）、八代將軍久明親王が東下のときも「六波羅北」から出立。

「六波羅北」については、『増鏡』に「六波羅の北に、代々將軍の御料とて造りをける檜皮屋一つあるに」と見えるので、いわゆる六波羅探題の北方の亭が將軍御所の近くに所在したことが明らかである。しかしここで重要なのは、將軍（鎌倉殿）が必ず六波羅御所に移徙してから東国に下向し、還京した際も必ず最初はここに入御しているという点である。熊谷隆之氏は、これらのことを踏まえて、儀礼的な鎌倉殿の本邸（亭）は六波羅御所であり、觀念上、鎌倉は征夷出征中の拠点であったことを指摘しているが、これは鎌倉時代の京都の国制的な位置を再考する上で重要な事実である。

このような観点から鎌倉時代（十三世紀半ば）の京都の空間を捉え直すと、中世前期の国家のあり方が垣間見えてくる。<sup>11</sup>すなわち、左京北部の中心には当該期の王家正邸ともいべき「閑院内裏」が陣中に囲まれて存在し、鴨川の対岸には、あたかもこれと対峙するかのように將軍御所を囲む武家の空間である六波羅が広がる。また、京中（左京）の所要所には幕府御家人たちの詰める「篝屋」が配置されている。平安京の中核としての機能を担った「大内裏」「神泉苑」は権威空間として残存するが、京都の西の境界は大宮大路（大内裏東側の南北路）となった。かつての平安京が東に空間移動したかのように、鎌倉時代の京都を東西に分ける中心線は南流する鴨川となり、京城を画した東京極大路の東には東朱雀大路が出現するのである。

**鎌倉御所の実像** 一般的な鎌倉時代の理解は、貴族と武士を対立的な形で明確に区分する見方が前提になっている。だから、鎌倉の將軍御所のイメージは江戸時代の大名の御殿や戦国時代の大名の屋形（館）のようなものである。しかし実は鎌倉の將軍御所も摂関家に準ずるステイタスをもつ上級貴族と同様の檜皮葺の寢殿造りの建築であった。<sup>12</sup>そして、その内部も諸大夫と侍という御家人の身分序列に対応した祇候空間（中門廊より中の内郭には侍

身分の者は入れない）が設定されていた。京都の上級貴族の亭と比べて独自なものといえ、侍所が广大で、そこに主人の出御する「出居」が用意されていたくらいのことであった。<sup>13</sup> また、御所内における女房たちの活動も京都に遜色のないものがあつた。<sup>14</sup> 鎌倉の將軍御所も王朝身分秩序に即して機能していたのであり、従来の認識は、事実と反するものも含めて、武士と貴族、京都と鎌倉の相違点のみを強調した一面的なものであつたと言わざるを得ないのである。

東国武士千葉氏と京都 鎌倉幕府成立以前の東国武士が京都とどのような関係をもっていたのか、具体例を挙げて検討してみたい。取り上げるのは下総の千葉氏である。千葉氏は坂東平氏の一流で平忠常の後裔。下総国の有力在庁として「権介」職を世襲し、頼朝拳兵の頃に八条院領であつた千葉庄を本拠として「千葉介」を称した。治承四年（一一八〇）、千葉常胤が頼朝の拳兵に呼応して幕府草創に活躍したことによって列島各地に所領を獲得した。源頼朝が拳兵する以前、常胤の六男胤頼は上洛して上西門院に祇候し、その御給によって叙爵を果たしている。また、三井寺に入って日胤と称した子息は以仁王の拳兵に参加して討ち死にしており、在京経験の豊富な孫の常秀は常胤に従つて九州まで転戦し、建久元年（一一九〇）には京官の兵衛尉に補されている。千葉氏の一族も在京活動を行つており、そこで各地から上洛した同輩との間に結ばれた「一所傍輩のネットワーク」が列島各地への進出の前提になつたことが想像されるのである。治承・寿永内乱の結果、千葉氏が西国に得た所領は肥前・豊前・薩摩・大隅の各地に及び、十三世紀半ば頃までには伊賀国の守護職も手にしている。また、一族の原氏出身の僧了行は九条家（撰関家）に仕えて渡宋し、嘉禎二年（一二三六）、一切経や「観音玄義科」などの經典類を請来した。彼の僧位は法印に到り、千葉氏の負担した閑院内裏西対の造営にも参画したが、九条家との関係から宝治合戦後に幕府転覆を謀つて捕縛されている。また、胤頼の子孫である木内氏は承久の乱後、大和や淡路に地頭職を獲得するなど

西国への進出が顕著で、この一族出身の道源（道眼）は西園寺家の助力を得ることによって渡元して經典を請来し、六波羅に那蘭陀寺を開いたことが知られる。道源は兼好法師とも親交があったようで『徒然草』にも二度登場する。<sup>15</sup>

一方、嫡流の千葉介についても、大番役で上洛した際、西園寺家に貢馬をしたり、西国所領の住人からの訴訟を聴断したり、時には傾城を争って配下の武士が貴族邸に乱入する事件を起こしたことなどの事跡が知られる。ちなみに、鎌倉末期、千葉介の在京宿所は清水坂にあった。<sup>16</sup>

鎌倉時代も首都は京都 鎌倉時代の京都には関東勢力による「武家地」が六波羅に形成され、また京中に居住する東国出身者も数を増していった。そうなると、京都人と東国人との間で社会的・文化的な軋轢や衝突が生じる。こともあった。しかし、『徒然草』第一四一段に登場する悲田院の堯蓮上人のように、東国武士の出身でありながら京都・東国双方の人の心性を深く分析・理解して両者の共生を図ろうとする人物も現れるようになる。

鎌倉時代、政治・文化・生産・流通など、首都機能のほとんどの部分は京都が担っていた。にもかかわらず、今日の歴史理解において、この時代の鎌倉は過大に、京都は過小に評価されている。そして、京都市民もまた、前代の平安時代や後代の室町・織豊期にばかり京都文化のアイデンティティを求めるあまり、鎌倉時代の京都に対する過小評価に加担しているように思えてならない。この際、鎌倉時代の京都をもっと知り、京都の鎌倉時代を再評価する必要を強く主張しておきたい。

注 (市民対象の講演要旨という性格上、必要最小限にとどめた)

- (1) 井上章一「日本に古代はあったのか」角川書店、二〇〇八年。
- (2) 上横手雅敬「鎌倉時代政治史像の再検討」(『日本中世国家史論考』塙書房、一九九四年、初出一九八八年)。
- (3) 上横手雅敬「日本中世政治史研究」塙書房、一九七〇年。
- (4) 拙稿「頼朝のイメージと王権」(拙著『武門源氏の血脈 為義から義経まで』中央公論新社、二〇一二年、初出二〇〇四年) 参照。
- (5) 野口孝子「平安宮内の道―馳道・置路・壇葛―」(『古代文化』第五五卷第七号、二〇〇三年)。
- (6) 頼朝在京の可能性については、保立道久「源義経・源頼朝と鳥津忠久」(『黎明館調査研究報告』第二〇集、二〇〇七年) を参照されたい。
- (7) 高橋昌明「平清盛 福原の夢」講談社、二〇〇七年。
- (8) 松蘭 斉「前右大将考―源頼朝右近衛大将任官の再検討―」(『愛知学院大学文学部紀要』第三〇号、二〇〇一年)。
- (9) 熊谷隆之「六波羅探題考」(『史学雑誌』第一一三編第七号、二〇〇四年)。
- (10) 高橋慎一朗『中世の都市と武士』吉川弘文館、一九九六年。
- (11) 拙稿「中世前期の権力と都市―院御所・内裏・六波羅―」(高橋康夫編『中世のなかの京都』新人物往来社、二〇〇六年)。
- (12) 満田さおり「鎌倉幕府御所の空間について」(京都女子大学宗教・文化研究所ゼミナール『紫苑』第六号、二〇〇七年)。
- (13) 岩田慎平「鎌倉幕府侍所に関する覚書」(『紫苑』第六号、二〇〇七年)。
- (14) 小野 翠「鎌倉將軍家の女房について―源家將軍期を中心に―」(『紫苑』第六号、二〇〇七年)、山本みなみ「近衛宰子論」(同 第九号、二〇一一年)。

(15) 拙稿「東国武士の在京活動と入宋・渡元―武士論の視点から―」〔鎌倉遺文研究〕第二五号、二〇一〇年、同「鎌倉時代における下総千葉寺由縁の学僧たちの活動―了行・道源に関する訂正と補遺―」〔京都女子大学宗教・文化研究所「研究紀要」第二四号、二〇一一年〕。

(16) 拙稿「京都のなかの鎌倉―空間構造と東国武士の活動―」〔福田豊彦・関幸彦編『鎌倉』の時代〕山川出版社、二〇一五年。

〈キーワード〉

幕府 京都 鎌倉